

## 被虐待児童への愛着形成を目的とした動物介在療法（ドッグプログラム） —情緒障害児短期治療施設の実践における臨床的検討—

海野千畝子<sup>1)\*</sup>・石垣儀郎<sup>2)</sup>・横井直子<sup>2)</sup>・山本秋子<sup>2)</sup>・山口修喜<sup>3)</sup>

1) 兵庫教育大学

2) 中日青葉学園わかば館

3) カウンセリングオフィス POMU

### Research of animal assisted therapy for abused children (Dog program) in residential home

UNNO Chihoko<sup>1)\*</sup>, ISHIGAKI Yoshio<sup>2)</sup>, YOKOI Naoko<sup>2)</sup>, YAMAMOTO Akiko<sup>2)</sup>, YAMAGUCHI Nobuki<sup>3)</sup>

本研究では、情緒障害児短期治療施設の被虐待児童を対象とした動物介在療法（ドッグプログラム）を愛着形成という側面から臨床的に検討した。対象は6歳から12歳の小学生女児6名である。ドッグプログラム前後において児童の情緒と行動の様相を比較した。

ドッグプログラム（DOG-P）構成は、グループプログラムと個人プログラムに分かれており、個人プログラムにおいては、筆者が犬一匹（筆者の所属犬）、施設職員1名いる中で、被虐待児童への心理療法（インテーク面接、思春期解離体験尺度（A-DES：adolescence dissociation experience scale）の変法、生育史聴取、EMDR（eye movement desensitization and processing）を行った。

結果、本来の施設側の治療に加えてドッグプログラムを行った介入群の児童らと施設側の治療のみの介入無群の児童らとの群間比較で、児童らの愛着形成を阻害する解離症状の数値は、介入群がドッグプログラム前後で有意な差を認めた。また、生活面において、施設指導員、施設心理士らの行動観察等から、介入群児童は介入無群児童に比べて早急に愛着形成が構築することが認められた。犬との安全な皮膚接触を通じた触れ合いを含むドッグプログラム（DOG-P）が、被虐待児童らの解離された感覚を統合し、必要な愛着形成を促進することが示唆された。

兵庫教育大学  
HYOGO UNIVERSITY OF  
TEACHER EDUCATION

#### ドッグプログラム参加の同意書について

1. ドッグプログラムでは、トムトムと一緒に(いっしょ)に、気持ちやからだの感じを学びます。
2. ドッグプログラムでは、トムトムと一緒に(いっしょ)に、今のこころの状態(じょうたい)を振(ふ)り返ります
3. ドッグプログラムでは、トムトムと一緒に(いっしょ)に、小さい時の自分の生きてきた歴史(れきし)を振り返ります。
4. ドッグプログラムでは、犬を信じることを学びます。
5. ドッグプログラムでは、未来(みらい)に希望(きぼう)がもてることを学びます。

1-5) にかいてあることを読んで、ドッグプログラムを私は、やる、やらない、を決めてください。<Oでかこんでください。>  
(なまえ)( )



\* 連絡先：〒673-1494 兵庫県加東市下久米941-1 兵庫教育大学 人間発達教育専攻